

御文^{おんふみ}あらあらうけ給はりて、長き夜のあけ、とをき道をかへりたるがごとし。夫^{それ}仏法と申すは勝負をさきとし、王法と申すは賞罰を本とせり。故に仏をば世^せ雄^{おう}と号し、王をば自在となづけたり。中にも天竺をば月氏という、我が国をば日本と申す。一閻浮提八万の国の中に大なる国は天竺、小なる国は日本なり。名のめでたきは印度第二、扶桑第一なり。仏法は月の国より始めて日の国にとゞまるべし。月は西より出でて東に向かひ、日は東より西へ行く事天然のことはり、磁石と鉄と、雷と象牙とのごとし。誰か此のことはりをやぶらん。

此の国に仏法わたりし由来をたづぬれば、天神七代・地神五代すぎて人王の代となりて、第一神武天皇乃至第三十代欽明天皇と申せし王をはしき。位につかせ給ひて三十二年治め給ひしに、第十三年^{みずのえさる}壬^{かのとり}申十月十三日辛酉に、此の国より西に百済国と申す国あり。日本国の大王の御知行の国なり。其の国の大王^{せいめい}聖明王と申せし国王あり。年貢^{みつぎ}を日本国にまいらせしついでに、金銅^{こんどう}の釈迦仏並びに一切経・法師・尼等をわたしたりしかば、天皇大いに喜びて群臣に仰せて云はく、西蕃^{せいばん}の仏をあがめ奉るべしやいなや。蘇我^{そが}の大臣いなめの宿禰^{すくね}と申せし人の云はく、西蕃の諸国みな此を礼す、とよあきやまとあに独り背かんやと申す。物部の大むらじをこし・中臣のかまこ等奏して曰く「我が国家天下に君たる人は、つねに天地・しゃそく・百八十神を春夏秋冬にさいはいするを事とす。しかるを今更あらためて西蕃の神を拝せば、をそらくは我が国の神いかりをなさん」云云。爾^その時に天皇わかちがたくして勅宣^{ちよくせん}す。此の事を只心みに蘇我^{そが}の大臣につけて、一人にあがめさすべし。他人用ひる事なかれ。蘇我の大臣うけ取りて大いに悦び給ひて、此の釈迦仏を我が居住の^{小壘田}をはだと申すところに入れまいらせて安置せり。物部大連^{ものへのおおむらじ}不思議なりとていきどをりし程に、日本国に大疫病をこりて死せる者大半に及ぶ。すでに国民尽きぬべかりしかば、物部大連^{ひま}隙を得て此の仏を失ふべきよし申せしかば勅宣なる。「早く他国の仏法を棄^すつべし」云云。物部大連御使ひとして仏をば取りて炭をもてをこし、つちをもて打ちくだき、仏殿^{ほうどの}をば火をかけてやきはらひ、僧尼をばむちをくわう。其の時天に雲なくして大風ふき、雨ふり、内裏^{だいり}天火にやけあがて、大王並びに物部大連・蘇我^{そがのおみ}臣三人共に疫病あり。きるがごとく、やくがごとし、大連^{ついで}は終に^{いのち}寿絶えぬ。蘇我と王とはからくして蘇生す。而れども仏法を用ゆることなくして十九年すぎぬ。

第三十一代の敏達天皇は欽明第二の太子、治十四年なり。左右の両臣は、一は物部大連が子にて、弓削守屋、父のあとをついで大連に任ず。蘇我の宿禰の子は蘇我馬子と云云。此の王の御代に聖徳太子生まれ給へり。用明の御子敏達のをいなり。御年二歳の二月、東に向かって無名の指を開ひて南無仏と唱へ給へば御舍利掌にあり。是日本国の釈迦念仏の始めなり。太子八歳なりしに八歳の太子云はく「西国の聖人釈迦牟尼仏の遺像、末世に之を尊めば則ち禍を銷し福を蒙る。之を蔑れば則ち災を招き寿を縮む」等云云。大連物部弓削宿禰守屋等いかりて云はく「蘇我は勅宣を背きて他国の神を礼す」等云云。又疫病未だ息まず、人民すでにたえぬべし。弓削守屋又此を間奏す云云。勅宣に云はく「蘇我馬子仏法を興行す、宜しく仏法を却くべし」等云云。此に守屋と中臣臣勝海大連等の両臣は寺に向かつて堂塔を切りたうし、仏像をやきやぶり、寺には火をはなち、僧尼の袈裟をはぎ、笞をもってせむ。又天皇並びに守屋・馬子等疫病す。其の言に云はく「焼くがごとし、きるがごとし」と。又瘡をこる。はうそうといふ。馬子歎ひて云はく「尚三宝を仰がん」と。勅宣に云はく「汝独り行なへ、但し余人を断てよ」等云云。馬子欣悦し精舎を造りて三宝を崇めぬ。

天皇は終に八月十五日崩御云云。此の年は太子は十四なり。第三十二代用明天皇治二年欽明の太子、聖徳太子の父なり。治二年丁未四月に天皇疫病あり。皇勅して云はく「三宝に帰せんと欲す」云云。蘇我の大臣詔に随ふべしとて遂に法師を引いて内裏に入る。豊国の法師是なり。物部守屋大連等大いに瞋り、横に睨んで云はく「天皇を厭魅す」と。終に皇隠れさせ給ふ。五月に物部守屋が一族、渋河の家にひきこもり多勢をあつめぬ。太子と馬子と押し寄せてたゞかう。五月・六月・七月の間に四箇度合戦す。三度は太子まけ給ふ。第四度めに太子願を立て、云はく「釈迦如来の御舎利の塔を立て四天王寺を建立せん」と。馬子願って云はく「百濟より渡す所の釈迦仏を寺を立て、崇重すべし」云云。弓削なのって云はく「此は我が放つ矢にはあらず。我が先祖崇重の府都の大明神の放ち給ふ矢なり」と。此の矢はるかに飛んで太子の鎧に中る。太子なのる。此は我が放つ矢にはあらず、四天王の放ち給ふ矢なりとて、迹見赤檮と申す舎人にいさせ給へば、矢はるかに飛んで守屋が胸に中りぬ。はたのかはかつをちあひて頸をとる。此の合戦は用明崩御・崇峻未だ位に即き給はざる其の中間なり。

第三十三崇峻天皇位につき給ふ。太子は四天王寺を建立す。此釈迦如来の御舎利なり。馬子は元興寺と申す寺を建立して、百濟国よりわたりて候ひし教主釈尊を崇重す。今の

代に世間第一の不思議は善光寺の阿弥陀如来という誑惑おうわくこれなり。又釈迦仏にあだをなせしゆへに、三代の天皇並びに物部の一族むなしくなりしなり。又太子、教主釈尊の像こ一体をつくらせ給ひて元興寺に居せしむ。今の橋寺たちばなでらの御本尊これなり。此こそ日本国に釈迦仏つくりしはじめなれ。

漢土には後漢の第二の明帝めいてい、永平七年に金神こんじんの夢を見、博士蔡愔はかせ さいいん・王遵おうじゆん等の十八人を月氏につかはして、仏法を尋ねさせ給ひしかば、中天竺の聖人摩騰迦まとう か・竺法蘭じくほうらんと申せし二人の聖人を、同じき永平十年丁卯ひのとうの歳迎へ取りて崇重ありしかば、漢土にて本より皇の御祈いのりせし儒家・道家の人々数千人、此の事をそねみてうつたへしかば、同じき永平十四年正月十五日に召し合はせられしかば、漢土の道士悦びをなして唐土の神百靈を本尊としてありき。二人の聖人は仏の御舍利と釈迦仏の画像と五部の経を本尊と恃怙たのみ給ふ。道士は本より王の前もとにして習ひたりし仙經さんげん・三墳さんぶん・五典ごてん・二聖三王の書たきぎを新あらたにつみこめてやきしかば、古はやけざりしが、灰灰はいとなりぬ。先には水にうかびしが水に沈みぬ。鬼神を呼びしも来たらず。あまりのはづかしさに褚善信ちよぜんしん・費叔才ひしゆくさいなど申せし道士等はおもひ死しゝぬ。二人の聖人の説法ありしかば、舍利は天に登りて光を放ちて日輪みゆる事なし。画像の釈迦仏は眉間みけんより光を放ち給ふ。呂慧通等の六百余人の道士は帰伏して出家す。三十日が間に十寺立ちぬ。されば釈迦仏は賞罰たゞしき仏なり。上にかみ挙ぐる三代の帝みかど並びに二人の臣下、釈迦如来の敵とならせ給ひて、今生むなは空しく、後生は悪道おに墮ちぬ。

今の代も又これにかはるべからず。漢土の道士信・費等、日本の守屋等は、漢土日本の大小の神・を信用して、教主釈尊の御敵となりしかば、神は仏に随ひ奉り、行者は皆ほろびぬ。今の代も此くの如し。上に挙ぐる所の百濟国の仏は教主釈尊なり。名を阿弥陀仏と云ひて、日本国をたばらかして釈尊を他仏にかへたり。神と仏と、仏と仏との差別こそあれども、釈尊をすつる心はたゞ一なり。されば今の代の滅せん事又疑ひなかるべし。是は未だ申さざる法門なり。秘すべし秘すべし。又吾が一門の人々の中にも、信心もうすく日蓮が申す事を背き給はゞ蘇我が如くなるべし。其の故は仏法日本に立ちし事は、蘇我宿禰そがのすくねと馬子との父子二人の故ぞかし。釈迦如来の出世の時の梵王・帝釈の如くにてこそあらましなれども、物部と守屋とを失ひし故に、只一門になりて位もあがり、国をも知行し、一門も繁昌せし故に、高拳たかあがりをなして崇峻天皇を失ひたてまつり、王子を多く殺し、結句は太子の御子二十三人を馬子が孫まご入鹿いるかの臣下失ひまいらせし故に、皇極天皇は中臣なかとみのかま鎌子こが計はからひとして、教主釈尊を造り奉りてあながちに申せしかば、入

鹿の臣並びに父等の一族一時に滅びぬ。

此をもて御推察あるべし。又我が此の一門の中にも申しとをらせ給はざらん人々は、かへりて失あるべし。日蓮をうらみさせ給ふな。少輔房・能登房等を御覧あるべし。かまへてかまへて、此の間はよの事なりとも御起請かゝせ給ふべからず。火はをびたゞしき様なれども、暫くあればしめる。水はのろき様なれども、左右無く失ひがたし。御辺は腹あしき人なれば火の燃ゆるがごとし。一定人にすかさなれん。又主のうらうらと言和らかにすかせ給ふならば、火に水をかけたる様に御わたりありぬと覚ゆ。きたはぬかねは、さかんなる火に入るればとくとけ候。氷をゆに入るゝがごとし。剣なんどは大火に入るれども暫くはとけず。是きたへる故なり。まえにかう申すはきたうなるべし。仏法と申すは道理なり。道理と申すは主に勝つ物なり。いかにいとをし、はなれじと思ふめなれども、死しぬればかひなし。いかに所領ををしゝとをぼすとも死しては他人の物、すでにさかへて年久し、すこしも惜しむ事なかれ。又さきざき申すがごとく、さきざきよりも百千万億倍御用心あるべし。

日蓮は少きより今生のいのりなし。只仏にならんとをもふ計りなり。されども殿の御事をばひまなく法華経・釈迦仏・日天に申すなり。其の故は法華経の命を継ぐ人なればと思ふなり。穴賢穴賢。あらかるべからず。吾が家にあらずんば人に寄り合ふ事なかれ。又夜廻りの殿原はひとりもたのもしき事はなけれども、法華経の故に屋敷を取られたる人々なり。常はむつばせ給ふべし。又夜の用心の為と申し、かたがた殿の守りとなるべし。吾が方の人々をば少々の事をばみずきかずあるべし。さて又法門などを聞かばやと仰せ候はんに、悦んで見え給ふべからず。いかに候はんずらん。御弟子共に申してこそ見候はめと、やはやはとあるべし。いかにもうれしさにいるに顕はれなんと覚え、聞かんと思ふ心だにも付かせ給ふならば、火をつけてもすがごとく、天より雨の下るがごとく、万事をすてられんずるなり。

又今度いかなる便りも出来せば、したゝめ候ひし陳状を挙げらるべし。大事の文なれば、ひとさはぎはかならずあるべし。穴賢穴賢。

日 蓮 花 押

四 条 金 吾 殿